

そ百キロにも及ぶ険しい山道を選び必死で南下を始めたのです。八月の末とはいえ夜ともなると何か肌寒い夜道を黙々と三日三晩恵須取から内路まで地図では近いが歩いて見ると大変なもので、中央山脈が横断している国道だけに原生林にはクマの出没するか所も何か所を何とか過ぎ日中は空襲や敵襲を避けながら漸くにして内路の一般邦人の帰国を待つところへ着くことが出来たが、思えば疲労と恐怖の必死の逃避行でした。

しかしそれから（内路）今度は鉄道利用で、真岡まで汽車で移動することになり数日待たされ、漸く炭車に乗ることが出来、やっと一息つくと同時に命だけは助かったんだなと思いなから真岡の収容所に到着き、それから間もなくソ連の進駐統治下におかれ多少秩序も安定して各々元の職場へ戻るよう命令的に勧められました。まだまだ精神的にも不安もあり本国へ帰り度い一心で残ることはやめたのです。

それから三年あまりの二十三年十月漸く待ちに待った引揚船到着「興安丸」に乗船でき函館の港に上陸、これからのことなど暫くわすれ十数年故郷を離れていただけ

に、ただ懐かしく子供の頃を思い浮かべただただ感激ひとしおでした。

戦後四十五年にもなる今、渡樺以来十年あまり、手に汗しながら家族一同一丸となり開拓した農地での収穫、苦しくもありまた楽しかった。それも今となってはすべてが水泡に帰し戦争の惨めさ悲しさを身をもって味わった。我々家族、特にすべてを失い子供達を案じながら他界した両親が、さぞかし無念のことと思う。

苦闘実らせた引揚者群像

北海道 新田 平治

四十五年前のあの無残な夏のように、ことしも炎暑が北海道を焼いた。平和だった樺太の生活を一瞬に破ったソ連軍の侵攻、四十万人の同胞は、ふるさとを追われ、樺太経営凡そ半世紀の財産を捨てて裸一貫で本土に帰りついた。

混乱のうち命を失ったものも少なくない。引揚者の多

くは、本道に定着し、筆舌につくせぬ労苦のうち生活を建て直した。

日本中が売り食い生活の時代、彼らには、はぎとられて食糧にかえる衣類一枚さえなかった。徒手空拳、悲壮な背水の陣で、戦後開拓の礎となった樺太引揚者の群像は、今大地に根をおろしている。

日高支庁管内約二十キロ、車で分けいる林道の左右には、乳牛の遊ぶ緑の牧草地や畑が木々の間に見え隠れする。

私は、現在美宇地区に耕地約三十ヘクタールに搾乳牛五十頭を飼育、メロン、西瓜、人参なども栽培する地域ではリーダー的安定農家となった。特にそ菜においては町間では草分け的存在である。

公職は、新冠町議会議員、各常任委員長を歴任、新冠町種畜農協理事、そ菜振興会会長などにおされている。

昭和二十年八月、札幌の鉄道教習所で鉄道員を目指していたが、健康を害し休暇をとり樺太留多加町上小原の自宅に帰っていた。

札幌を発ったのが八月九日、この日、ソ連軍が北緯五

十度線を越えて侵攻してきたことを知らなかった。

しかし、自宅に帰りついた頃には、すでに敷香、恵須取方面からの着のみ着のままの避難民が続々と南下していた。

道ばたにころがる老人や幼児の死体、やがてソ連軍は留多加にもはいり、治安が乱れる日々がきた。

混乱が、一段落すると、働ける者はすべて造材山に狩り出され、残された老人、婦女子子供は自給自足で飢えをしのいだ。

約三年間、そんなどん底生活の中で待ちわびた本土への引揚げ、昭和二十三年六月、一家九人はすしつづめの無蓋車で真岡港に向った。

収容所にはいつてまた二十日間乗船を待たされた。収容所内では、ハシカと赤痢が蔓延、人々は残されるのを恐れてひた隠し、このためやっと乗船した新興丸の船底では、もがき苦しみながら多くの子供たちが病に倒れた。

幸い、私たち一家は揃って無事函館に上陸することが出来た。

身寄りのない無縁故者五十〜六十人が十勝の音更町に運ばれ、旧陸軍車両隊の建物に一たん落つく。そして、その日から新しい苦闘が始まった。食べもの、仕事もなく、ワラにもすがる気持ちで世話を頼んだ周旋屋に前渡金をだまし取られて、夜中に飯場を脱走したこともあった。

穂別町に伯父が引揚げていることを知り、そこへ行って見たが状態は同じ、その日暮らしの出面稼ぎで生計を支えていた。

その間、父久太（五十八・十二美宇で死去）は足を棒にして土地を捜し廻った。そしてやっとの思いで旧新冠御料牧場が引揚者に払い下げられることを知り、昭和二十六年春、この地に入植することが出来た。

当時、付近一帯は、うっそうたる森林、道らしい道もない山中には、ヒグマが出没して入植者をおびやかした。大樹を倒し、草を焼いて耕した畑には、以来秋になると数十頭が出現して一夜で作物を食い荒らしていた。

昭和二十八年部落会長に推され開拓者の窮状の打開に

走り廻った。火薬伐根の許可はとったものの、ハツバだけでは大木の根は抜けず開拓は遅々として進まない。

近隣部落代表と共に再三、再四支庁に足を運び、開拓計画変更を陳情、ようやくレーキトザによる抜根ができるようになったのが昭和三十三年、ようやく畑らしい畑がみられるようになったのは、入植から十年以上の歳月がかかった。

そして、この間に約八百戸といわれた戦後入植者のうち三百戸以上が離農していった。

三十五〜三十六年頃から地区で乳牛の導入が盛んになり造田ブームも進んだ。

一時、水田も作ったが生産調整時代を迎えて酪農主体の経営に踏み切った。

いま、苦勞をかけた母と息子夫婦、孫たちを含めて一家八人新築した住宅で笑い声のたえない日々で、悪夢をしのぶべくもない。

生れ育った樺太の山河は、今も折にふれて思い出す。引揚げ、入植当時の苦闘は、いまでは夢のようだが、樺太仲間の励まし合いと逆境に立ち向かう精神でここまで

きたと思う。

戦後の緊急食糧生産の一端をにない、今日の日本の繁栄に頑張ったのだという自負は、みんなが持っていることと思う。

私の戦争体験

北海道 高塚 稔

私は昭和十四年豊原で生まれる。十八年五歳のとき父が戦争で満州へ行くことになり泣きながら見送った記憶がある。戦争っておそろくなんのことかわからなかったと思う。廻りの大人達の話聞いて泣いている姿を見て恐ろしさ、淋しさなど子どもながらに感じていたと思う。

二十年四月小学校へ入学する。戦争が激しくなってきた。飛行機が何十機も飛んでくる。低空飛行で屋根すれすれだったり電柱に触れて落ちたりする。飛行機の音を聞いたたび、逃げ回っていた。

十日ほど防空壕での生活が続いた。昼となく夜となく爆弾が落ちるその地響きで土が頭から降ってくる。外を見ると空を真っ赤に染めている。防空壕も危なくなり馬車で家族と近所の人二十人ぐらいで山奥に逃げる。途中飛行機の音がする。大人の一人がB29だと大声で馬車から降りろ……と叫ぶ。ころげ落ちるように林のなかへ逃げ込んだ。山奥に何日いたか記憶にないが静かになり皆んなで馬車で自宅へ戻る。間も無くラジオから終戦の詔勅が流れ、子供ながら嬉しかったのだろう外へ飛び出し騒いだ記憶がある。

昭和二十年八月十五日終戦を迎え、父も満州から帰って来た。ロシア人もつきつきと村に来了。兵隊が銃を片手に家へはいってくる。天井に銃を向け撃つ。外が見えるほどの穴が五ツ六ツ空いていた。このときも殺されると思うほど恐ろしかった。十月ロシアの子供が入学し教室を占領される。したがって日本の子供は外に出て遊ぶより仕方がなかった。この日はとても寒くあられが降り皆んな鼻水流し手足を真っ赤にして遊んでいた。思い出したくないことである。それからほとんど学校へは行か